現代中国語のカタカナ発音表記をめぐって

# 「栃」の中国語音は lì それとも xiàng？

## ——和製漢字の中国語音をめぐって

千島 英一

### 1

もう五、六年前にもなろうか、香港のネット上を大いに盛り上げた文字に「駅」の字がある。この字、われわれに日本人にとっては何の変哲もない文字だが、香港の人たちにとってはなんとも奇妙な文字に映ったようである。曰く、〝請問有冇「駅」呢個字㗎？〟（「駅」なんていう字あるの？）とか、〝將軍澳嘅城中駅，究境「駅」呢個字點讀？〟（將軍澳の城中駅、いったいこの「駅」という字どのように読むの？）といった質問が相次いだ。これは香港のデベロッパーがＭＴＲ（地鐵）將軍澳駅上に建設した二つの高層ビルを〝都會駅〟と〝城中駅〟とネーミングし大々的に売り出したことから始まった。しかもYouTubeなどで「駅」の字音を中国語で「駅」を表す「站」（tʃa:m$^{22}$）と訓読させていたので、混乱に拍車をかけたようであった。

言わずもがなであるが、これは「駅」の本字である「驛」の声符の部分が日・中によって簡略化の仕方が異なっていることからきている。すなわち、香港の人々を悩ました「駅」の字は、中国の簡体字では声符の〝睪〟を〝圣〟に、日本の簡略字では〝睪〟を〝尺〟に簡略した違いによって生じたものである。

こうした違いは、このほかにも、桜（櫻）、広（廣）、対（對）、浅（淺）などの文字がよく知られているが、このような本字のあるものについては、日中間の簡略化の違いがあるだけなので、本稿の議論には含まない。本稿で議論の対象とするものは「栃」「峠」「粂」「麿」……といったいわゆる国字あるいは和製漢字と呼ばれている日本生まれの漢字のことである。新井白石は、「國字トイフハ本朝ニテ造レル異朝ノ字書ニ見ヘヌヲイフ。故ニ、ソノ訓ノミアリテ音ナシ」（『同文通考』、杉本つとむ編、一九七三、『異体字研究資料集成』第一巻、雄山閣、二四三頁）と定義している。

ところが、こうした日本生まれの漢字について、その多くは、現行の中日辞典では発音どころか文字そのものが収録されておらず、中国語を学ぼうとする日本人にとっても、日本語を学ぼうとしている中国人にとっても頭を悩ます問題の一つとなっている。

そこで、本稿では、和製漢字をいった

い中国語音でどのように発音したらよいか、を検討しようとするものである。紙幅の関係上、今回は主に「栃」の字に焦点に当てて考察してみたい。

## 2

学生時代のことだから、もう四十年以上も前のこと。ある日の某先生の授業中、宇都宮出身の小林君という同学が「先生、栃木県の〝栃〟は中国語ではどのように発音するのですか?」と尋ねた。間髪を入れずに先生応えて曰く、「〝栃〟は国字ですが、〝栃〟の本字は〝橡〟ですので、xiàng と発音します」と。確かに、諸橋『大漢和辞典』巻六でも、

栃［國字］とち。もと杤に作る。深山に生ずる喬木の一。葉は七枚の小葉を具へ、夏、淡黄色の花を著け、果は栗に似て食用に供する。橡。七葉樹（二九三頁）

杤［國字］とち。樹木の名。多く深山に生ずる落葉喬木。一説に、とち（十千）即ち万と木の合字といふ。栃に同じ。〔應安二年、結城直光書状〕杤本上野入道殿。（一六八頁）

橡　シャウ、ザウ　［集韻］似兩切　［養］T一ㄤˇ hsiang4　①木の名。とち。つるばみ。七葉樹科の落葉喬木。（以下、略）（五六〇頁）

とあり、白川静博士の『字統』にも、

栃　とち　国字　とちの本字は橡（しょう）。七葉樹科の落葉喬木。とちには他にも〔類聚名義抄（るいじゅみょうぎしょう）〕に様（様）・杼・朽・佇・栩などの字をあてるが、杼・栩はくぬぎ、様は橡の実。朽はおそらく佇の誤字。国字の栃はまた杤にも作り、栃は十千（とち）の木の意であろうという。（六六二頁）

と記述されていたこともあり、爾来、学生から教学の立場へと変わっても、栃木県はずっと Xiàngmùxiàn で通してきた。

## 3

そんな折り、二〇〇九年一〇月、中国で『中国語言生活緑皮書』（教育部語言文字信息管理司組編）が出版された。そこに「日本漢字的漢語読音規範（草案）」（一―四頁）があり、漢語文献中使用頻度の高いとされる三二字が取り上げられ、その中に「栃」の字も含まれていた。該書の「栃」の字音は lǐ であった。試みに、中国からの留学生たちに聞いてもそのほとんどが lǐ と発音していた。理由は、「栃」の字形が「栃」（音 lì、意味は「飼い葉桶」。本字は「櫪」）に似ているからだという。

で、昨今、多くの自治体が中国と友好都市などを締結していることから、栃木県では如何と、栃木県庁は国際課なる部署に電話をかけ、「栃」の中国語音はどうなっているのか、聞いてみた。すると相手側（栃木県は浙江省と結んでいる）が栃木県を Lìmùxiàn と発音しているので、そのまま踏襲しているとのこと。うーむ。なんという見識のないことか。というのも「栃」の字については、中田祝夫氏がその著『日本語の世界4　日本の漢字』

（中央公論社、一九八二年）で、「栃」の字の起源と変遷を詳細に論じ、それまで使われていた「杤」字などに代わって、明治中央政府の小賢しい一役人によって作られたと思しき「栃」字が、明治十二年の太政官布達以来使われるようになったとして、この文字使用の歴史を無視した暴挙に大憤激し、

「栃」字が作られ、それが世に普及するまでの過程には、日本人として思い出したくないような苦い体験があった。しかし、これは一つの教訓であるから、日本人としては、自虐的に反省しておく必要があると思う。（一三八頁）

とまで書いているからだ。中田氏の「栃」は「杤」に非ずというこの言、如何とす？いわんや「杤」が「栃」なんて中田氏ならずとも言語道断のことではなかろうか。

## 4

同じ自治体であっても新潟県では新潟県議会がきちんとした見識を示している。すなわち、やり玉に挙げたのがほかならぬ「潟」の字で、

「県や国の関係団体の中国向けウェブサイトで新潟を「新泻」としているものがある。泻は「瀉」の略字（中国簡体字）で下痢の意味だ。イメージを損なうので「新潟」と改めよ、と県議から指摘された」（朝日新聞二〇〇八年三月二三日号）

と載っていた。この新潟の似て非なる文字はあくまでも非であり、混同すべきではないという新潟県議の至極まっとうな見識に比べて、栃木県は依然として中田祝夫氏の「日本人として思い出したくないような苦い体験」の反省をまったく生かしていないと言えよう。と同時に、白川静博士の「漢字は国字だ」（『漢字百話』他）とする発想に思いをいたすと、和製漢字には、わが国からその中国語音を示しておく必要があるのではなかろうか。

もう一字、和製漢字の中国語音について述べておこう。「麿」である。学生時代に愛用していた『辭海』（一九四九、中華書局印行）の古い版では、

麿　日本字，以麻呂二字合成，讀若馬陸。為自稱之代名詞，人名亦多用之。（一四四三頁）

とあるが、前述した「日本漢字的漢語読音規範（草案）」では、「麿」の字形が「磨」に似ているからか、字音を mó としている。一般に、「麿」のような合字（二字を組み合わせて一字にしたもの）は複音字として、「瓩」qiānwǎ（キロワット）、「瓩」qiānkè（キログラム）などと複音節で発音される。しかるに、「麿」については古い時代の辞書でははっきりと mǎlù と複音節で発音を示しているにかかわらず、なぜか mó と単音節の発音としている。こうしたちぐはぐさからも脱却すべく、和製漢字の中国語読音くらいは、中国に頼ることなく、われわれ自身の手で決め、世界に向けて提案していこうではないか、というのが筆者の思いでもある。

（ちしま・えいいち　熊本大学）